

セルリ－ (施設) (黒ボク土)

〔土壌肥料〕

本作目は、栄養生長型であり窒素を中心に養分を連続吸収する。収穫まで養分を供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。根は大部分が地際を横に浅く広がり、吸肥力が弱い。このため、作土層が深く、通気性の良い有機質に富んだ肥沃な土壌を好む。堆肥や有機質資材の施用の効果は土壌の化学性、物理性改善に効果が高い。窒素、カリについては、茎葉部の肥大期の要求量が多い。そのため、この時期に肥料切れしない肥培管理が必要である。

〔病害虫・雑草防除〕

アブラムシ類の防除は、モザイク病の発生を抑える。特にマメハモグリバエの侵入には気をつけ、施設の被覆には近紫外線フィルムを用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	<p>土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。</p>	<p>堆肥(年間) 2~3t/10a</p>
化学肥料 低減技術	<p>基肥は、畝内のみの局所施肥とする。 肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収に対応した施肥成分の供給を行う。 有機質肥料による施肥を行う。</p>	<p>成分量で慣行施肥量の20%減 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%</p>
化学農薬 低減技術	<p>B T剤をローテーション散布に位置づける。 (対象：ヨトウムシ類など) 微生物農薬を利用する。 (対象：灰色かび病) 天敵農薬を利用する。 (対象：ハモグリバエ類など) 対抗植物(クロタラリア、ギニアグラス等)を利用する。 (対象：ネコブセンチュウ) 夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象：土壌病害虫、雑草など) 点滴性被覆資材を利用する。 (対象：灰色かび病など) 近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象：灰色かび病、ハモグリバエ類など) 開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象：ヨトウムシ類、アブラムシ類など) 性フェロモン剤による発生予察、誘殺を行う。 (対象：ハスモンヨトウ) マルチ栽培を行う。(対象：雑草など)</p>	<p>慣行使用回数の 20%減</p>
その他の 留意事項	<p>有機質肥料は、遅くとも播種20~30日前までに施肥し、分解を促進させておく。 作土深の確保を図ると共に、優良有機物資材施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 灌水による溶脱に注意する。 圃場のpHの低下に気をつけ、石灰質資材を適宜施用する。 黒ボク土ではリン酸吸収係数が高いのでリン酸欠乏に注意する。 土壌の加湿により生理的に根腐れを起こしやすいので、灌水に注意する。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。</p>	

セルリー (施設) (灰色低地土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長型であり窒素を中心に養分を連続吸収する。収穫まで養分を供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。根は大部分が地際を横に浅く広がり、吸肥力が弱い。このため、作土層が深く、通気性の良い有機質に富んだ肥沃な土壌を好む。堆肥や有機質資材の施用の効果は土壌の化学性、物理性改善に効果が高い。窒素、カリについては、茎葉部の肥大期の要求量が多い。そのため、この時期に肥料切れしない肥培管理が必要である。

〔病害虫・雑草防除〕

アブラムシ類の防除は、モザイク病の発生を抑える。特にマメハモグリバエの侵入には気をつけ、施設の被覆には近紫外線フィルムを用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥(年間) 2~3t/10a
化学肥料 低減技術	基肥は、畝内のみの局所施肥とする。 肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収に対応した施肥成分の供給を行う。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で慣行施肥量の20%減 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%
化学農薬 低減技術	BT剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:ヨトウムシ類など) 微生物農薬を利用する。 (対象:灰色かび病) 天敵農薬を利用する。 (対象:ハモグリバエ類など) 対抗植物(クロタラリア、ギニアグラス等)を利用する。 (対象:ネコブセンチュウ) 夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象:土壌病害虫、雑草など) 点滴性被覆資材を利用する。 (対象:灰色かび病など) 近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象:灰色かび病、ハモグリバエ類など) 開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象:ヨトウムシ類、アブラムシ類など) 性フェロモン剤による発生予察、誘殺を行う。 (対象:ハスモンヨトウ) マルチ栽培を行う。 (対象:雑草など)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	有機質肥料は、遅くとも播種20~30日前までに施肥し、分解を促進させておく。 作土深の確保を図ると共に、優良有機物資材施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 灌水による溶脱に注意する。 圃場のpHの低下に気をつけ、石灰質資材を適宜施用する。 土壌の加湿により生理的に根腐れを起こしやすいので、灌水に注意する。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。	